

# グラフィック・メディスンと医療マンガ研究

海外マンガ研究の学際的な言説をマンガ研究に応用する可能性

司会・発表者：中垣 恒太郎（専修大学）

発表者：安達 映子（立正大学）

発表者：小林 翔（一般）

ディスカッサント：落合 隆志（日本グラフィック・メディスン協会代表理事）

キーワード：医療マンガ、ナラティブ・メディスン、マンガジャンル論、医療人文学

## 【全体趣旨】

「グラフィック・メディスン」はイアン・ウィリアムズ（コミックスの代表作として *The Bad Doctor* [2010]、*The Lady Doctor* [2019]）を中心に 2007 年に提唱された概念であり、医療分野にコミックス（マンガ）の手法を導入する研究領域である。高度に複雑化する医療において多様な医療従事者が情報を共有し、患者やその家族への伝達に役立てることを目指す上でコミックス（マンガ）をどのように活用しうるかに力点が置かれている。「医療人文学」とも連携し、医療従事者と人文系研究者、表現者とを繋ぐ交流活動の場が構築されつつある。医療現場においてもコミックスは患者に対してわかりやすく病状を説明する際の実用的なコミュニケーションの手段として導入が進んでおり、医療関係者とイラストレーター、コミックス・アーティストを交えたワークショップなども活発に展開されている。医療を素材にしたマンガを医療現場で啓蒙・教育活動に導入する取り組みも行われており、医療現場においても「語り」の効用に注目した別定義による「医療ナラティブ」研究も進展しつつある。

2019 年に 10 回目を迎える年次学会（2019 年 7 月英国にて開催）の主催者によれば、従来を大きく上回る 22 カ国 150 名を超える発表応募があり研究学会としての新しい局面を迎えているという。スペイン語圏の研究団体によるホームページ開設など世界的な規模での研究交流活動も進展を示している。

グラフィック・メディスンに位置づけられる作品は日本でも翻訳がなされてきた。たとえば、母親ががんになってから患者本人および家族の日常が変容していく様子を淡々とした筆致で描く、ブライアン・フィース『母のがん』（2018）は、読者が選ぶ海外マンガアワード「ガイマン賞 2018」でも複数の票を得る注目作となった。あるいは、韓国ソウル出身のフツー『ガンカンジャ（4 巻まで刊行、WEB 上で完結）』（2016）は韓国で書籍化、米国「ハフィントン・ポスト」に掲載され、日本でも書籍刊行されるなどグローバルな流通・受容も注目すべき動きと言える。単発としてではなく「グラフィック・メディスン」の枠組みにより包括的に捉えることで個々の作品の特質も浮かび上がってくる。

グラフィック・メディスンの領域を学術研究と作品紹介の両面から牽引するペンシルバニア大学出版局は「グラフィック・メディスン」のレーベルを打ち出し叢書として続々と刊行している。Czerwiec, *Taking Turns: Stories from HIV/AIDS Care Unit 371* (2017) などの作品に加えて、出産をめぐるイラスト、グラフィックスを集めたユニークなアンソロジー、*Graphic Reproduction: A Comics Anthology* (2018) や、グラフィック・メディスンの見地から捉えるゾンビ論、*The Walking Med: Zombies and the Medical Image* (2016) などの研究書もレーベル内に併置されておりその射程は多岐にわたる。他の出版社からも、カナダ・モントリオールの女性作家によるグラフィック・メモワール（回想録）として、声を失ってしまった経験を描く、Georgia Webber, *Dumb: Living without Voice* (2018) なども刊行され活況を呈している。

中でも 2015 年にペンシルバニア大学出版局から刊行された *Graphic Medicine Manifesto* は、その題名が示すように、「グラフィック・メディスン」学会を中心的に担うメンバーによる概念提起を込めた論集である。コミックス研究史における「グラフィック・メディスン」の位置づけから、社会関与共働型研究や医学教育における活用について、コミックス表現における病をめぐる図像学研究など、コミックス表現者および学際的な研究者、医療従事者による多様かつ具体的な実践例が示されている。この書籍が『グラフィック・メディスン・マニフェスト』（北大路書房）として 2019 年に刊行される。

本ラウンドテーブルでは、この翻訳書刊行を契機に英語圏のグラフィック・メディスンの研究動向を参照しながら、日本のマンガ研究への応用可能性（あるいはその困難・課題も含めて）について展

望してみたい。まず中垣が導入として、「グラフィック・メディシン」研究の動向、その多岐にわたる学際性の特色および傾向について概観し、日本のマンガ研究への応用をめぐる論点を提起する。海外におけるコミックスおよび医療を取り巻く文化的土壌の違い、あるいは、日本のマンガ文化の豊穡などを参照しながら、日本の「医療マンガ」をジャンルとして規定することはどのようにして可能であるか、海外マンガとの比較文化研究、「医療マンガ」を題材にした学際的研究の可能性、さらに日本のマンガ研究の発展にこの研究領域をどのように繋げることができるのかを展望する。

続いて『グラフィック・メディシン・マニフェスト』の訳者の一人である安達映子（ソーシャルワーク論）により日本の学術研究における応用実践例としての報告を行う。臨床に携わる医療者・対人支援職に対してマンガを用いたグラフィック・メディシン・ワークショップを実施した経験を中心に、グラフィック・メディシンのナラティブ・トレーニングとしての意義と魅力を紹介する。グラフィック・メディシンの前提の一つになっているナラティブ・メディシンは、医療者にはナラティブ・コンピテンスが必要であることを主張し、これを高めるための取り組みとして精読（close reading）と創作的記述（creative writing）を推奨する。それをマンガという媒体で実践しようとするのがグラフィック・メディシンであるが、マンガ表現の奥行きと多様性は、この「読むこと」と「書くこと（描くこと）」というトレーニングの可能性を大きく拡張する。「わかりやすさ」や「手に取りやすさ」というメリットにとどまらないマンガの価値を、それについて多角的に論じている『グラフィック・メディシン・マニフェスト』を参照しつつ検討する。

さらに2018年度に行ったラウンドテーブル「マンガと医療」を発展させる形で、小林翔（メディア論）がジャンルマンガ論の観点から「医療マンガ」をどのように規定できるかを探る。ジャンル史を俯瞰しつつ、マンガ史上で「医療マンガ」が果たした役割はどのようなものであったのか。グラフィック・メディシンをめぐる考察と重ね合わせることによる比較マンガ文化論の観点も有効であろう。

各論を踏まえた後に、ディスカッサントとして、落合（日本グラフィック・メディシン協会代表理事・医療人文出版社 SCICUS 代表）が日本グラフィック・メディシン協会の取り組みについて報告し、討論の切り口を提起した後に、登壇者およびフロアを交えて討論・意見交換を行う。英語圏グラフィック・メディシン学会、スペイン語圏グラフィック・メディシン（HP を軸にした活動）、および日本グラフィック・メディシン協会などの実践が示すように、それぞれのメディア文化事情、医療を取り巻く事情を踏まえた分野横断的な活動と国際的な交流に対する機運も高まっている。マンガ研究を軸としたプラットフォームを構築することで、医療系をはじめとする様々な分野研究者との連携はどのように展開しうるのだろうか。文学、ソーシャルワーク論、出版文化の現場をも交えた学際的研究に本ラウンドテーブルの特色があり、グラフィック・メディシンと医療マンガ研究の概念を比較考察することにより、マンガメディアの特性を探り、マンガ研究の応用可能性をも展望する。

(NAKAGAKI, Kotaro | ADACHI, Eiko | KOBAYASHI, Sho | OCHIAI, Takashi)

## 参考文献

- Czerwiec, M. K. *Taking Turns: Stories from HIV/AIDS Care Unit 371*. Pennsylvania UP, 2017.
- Czerwiec, M. K., et al, eds. *Graphic Medicine Manifesto*. Pennsylvania UP, 2015. 『グラフィック・メディシン・マニフェスト』小森康永、平沢慎也、安達映子、岸本寛史、奥野光、高木萌訳（北大路書房、2019年）。
- Johnson, Jenell. *Graphic Reproduction: A Comics Anthology*. Pennsylvania UP, 2018.
- Servitje, Lorenzo, and Sherryl Vint, eds. *The Walking Med: Zombies and the Medical Image*. Pennsylvania UP, 2016.
- Webber, Georgia. *Dumb: Living without Voice*. Fantagraphics, 2018.
- Williams, Ian. *The Bad Doctor: The Troubled Life and Times of Dr. Ian James*. Myriad, 2010.
- . *The Lady Doctor*. Myriad, 2019.
- フィース、ブライアン『母のがん』高木萌訳・小森康永解説（ちとせプレス、2018）。
- フツー『ガンカンジャ』全4巻（KADOKAWA／メディアワークス、2016）。